老人クラブ囲碁・将棋大会

「ウーン、その手はちょっとまずいかな」＝熱戦が続く会場＝（中央公民館で）

八月二十五日、中央公民館で市老人クラブ連合会（竹内甲会長）主催の囲碁・将棋大会が開かれました。

食生活改善推進員が、自慢の献立を持ち寄って作った家庭料理の小冊子ができました。これは、おかあさんの味を家族が受けつぐとともに、健康づくりの一助にと願って作ったものです。希望者に頒布します。

・金　額　一部　三百円
・申込み　保健課健康指導係（七）三四〇一内線二四五へ

私達の子供会・㈠

白新町一丁目

以前町内一つの子供会が、別れて各丁目ごとに発足して四年、市のモデル地区指定を受け昨年、一昨年と市公民館からのご指導、協力をえて、ようやくここまで来たと言う感じです。

年一回の総会には五、六年生も含めて行い、希望が沢山とび出し賑やかに過ごします。今年の行事も、夏休みラジオ体操、山登り、球技大会、もちつき、歓送迎会の計画を立てております。

世帯数三十六、児童数四十六人と、行事の案内は幼児やお年寄りも含めてお誘いし参加を呼びかけて喜んでいただいています。特に山登りは子供達も楽しみの一つとなって夏休み最初の日曜日という日程を取り、参加者は会員以外の小学生のいない家庭や中学生親子、幼児、父兄合せて六十余名、マイクロバス二台を連ね、今年は赤谷・焼峰登山、加治川の河原で水浴びしたり名物の〝トン汁〟におにぎりを食べ、すいか割りを楽しみました。前日までの雨降り、今にも降りそうな行きすぎる厚い雲を気にしながら、しりもちついたり、どろんこ道を歩いた事、山登りも回を重ねて子供達の方がうまくなり、河原で食べたすいかのおいしかったこと、和気あいあいに一日を過ごし楽しい思い出となりました。

一つの行事を決めて実行にうつすまで各役員の積極的な協力理解があればこそ、又参加する子供達はもちろんご父兄の思いやりがなければここまで長続きするはずもなく、一人一人の子供の嬉々とした姿を見ていると一緒にやってきて良かったと実感もひとしおです。

私共の町内の子供達の一つ良い点を上げればあいさつの良くなったこと。「おはよう」「こんにちわ」「気をつけてね」「……」等誰にでも一声かけると返って来る笑顔や言葉に、みーんな素直で可愛いい子だとこの頃特に思えることなのです。

他人の子供だと思わず町内の子供、ひいては地域、社会の子供という感じでみつめ、これからものびのびと育って欲しいと願わずにはいられません。各丁目ごとに子供会はそれぞれ活躍をしていますが、互いの情報交換、親睦を深めるために各役員中心に白新町子供会育成連絡協議会を発足して二年、町内全体での特色ある活動をし、今年はすでに講演会、キャンプ、県主催青少年リーダー研修参加と行事をすすめているところです。

（記事は白新町一丁目子供会からの提供）

（写真は、加治川の河原で〝すいか割り〟に興ずる子供たち）

（屋内で親子スポーツを楽しむ）

「おかあさんの味」＝特集号ができました＝

市民文芸

俳句

豊栄市排句会

田辺　麦雨
根付く稲金気瘦田に田水沸く
松永　松翠
水滑の青目海治して田水沸く
小林千恵子
田水沸く花びら軽き農夫の死
轡田　幸泉
出稼村蛙の畦寝田水沸く
橋本　麦穂
田水沸く農夫四つ辻う汗と泥
坂井　耕月
百姓の堪吹く農衣田水沸く
高橋　香雪
田水沸風も青さに透けて見え
天野ただお
休耕田背にして作柄田水沸く
星野　荘城
豊作の兆し今日も田水沸く
成田卯女子
嫁がせて帰る古里田水沸く
青柳　呼舟
田水沸き海の風来る知人の葬
斎藤　土生
小魚も必死に生きて田水沸く
小柳　翠歩
増収の夢ふくらまず田水沸く
長谷川逸雄
田水沸く土嚙発掘の郷に老ゆ
田水沸く農夫胸毛を日に晒す
笠原　香蘭
田水沸く田水を浴びる里鶏
高橋　紅夢
田水沸く捨てたる村を曳がつなぐ
阿部　竜堂
田水沸き売った田田に沸く来練
後藤よしい
田水沸き逆田の追肥沸きかえる
小林　梨葉
田水沸し梯子田何時も水もれて
青木　詩浪
鷺いつか遂こなくなり田水沸く
山崎　智盛
取草を埋ればぐわきっと田水わく
五十嵐柳翠園
おふくろの味手でつまむ里帰り
臼井さつ子
米田　とみ
甲子園お茶の間に来て力瘤
服部　尚二
馬名札走りさうな名強く書き
高見三左エ門
祝いにと釣師は黒い鯛を呉れ
橋本　ひろ
それぞれの想いを乗せて夜汽車行く
小池　浜
初恋に逢いて夜まで落ちつかず
佐藤啓四郎
徹夜したマージャン課長の目が捕え
大島　残葉
勝って泣き負けて泣いてる甲子園
本間　重蔵
冷夏にも負けず家計簿までが冷え
大倉　貞光
へそくりも底をつかせて孫帰り
鹿島　郁子
郷愁を誘う夜空の遠花火
吉川　初枝
つれづれに見る程淋し盆蹠龍
師橋　山雨
何かよいことがありそう茶がうまい
水田蛙太郎
朝の野路草のそよぎにある生気
井上　睦子
破裂した勘忍袋悔いて縫う
中川　草舎
秋風のように定年しのび寄る
三膳　一男
今日のこと明日にまわした重い箸
原康秀さん（早通南三）　二四冊
ひしの実会（市内保育園職員で組織）　二冊

川柳

自由吟　豊柳会

長谷川嵐潮
雑草も皆それぞれに実を結び
曽我　天堂
焼酒は金持ちが飲むよき時代
阿部　雅雄
財布の紐ガードは固い冷夏の盆
三村　豊
すんばたへ安兵衛が憑く甲子園

言葉のしつけ　身近な手本は家庭から

言葉は、幼児期から正しくはっきりと覚えさせて、きちんとした日本語を身につけさせるようにしましょう。

テレビなどの発達で、子供は自然に言葉を覚える機会が多く、耳から入るいろいろな言葉―単語―をどんどん吸収しています。しかし、なんといってもお母さんとの会話を通して、子供はどんなときにどういう言葉を使うかというその場の状況や感情と一体となった実のある表現を体得していきます。

ですから、子供は、まずお母さんを通して、さらにお父さんとお母さんのやりとりを聞きながら、言葉（の使い方）を身につけていきます。

親同士のなに気ない会話も子供への影響を考えて、それなりの配慮をすることが大切です。

子供にとっては、お母さんの言葉遣い、そして家庭での会話が、言葉を学習するうえでの身近なお手本といえるでしょう。

記念誌「二葉」を発行

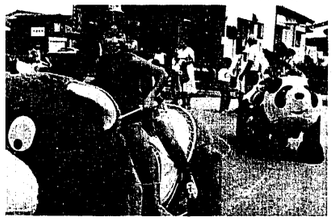
市立二葉保育園（阿部恵子園長）では、創立二十周年と新園舎完成を記念して、園のあゆみなどを記した記念誌「二葉」（B5八十五ページ）を発行しました。

この記念誌には、卒園者の保育園時代の懐しい思い出、母の会や園に関係した人たちの創立当時の苦労話などが綴られています。

早通ふるさと祭り

第7回早通ふるさと祭りが、8月23日から2日間開かれました。

（写真はサファリーペット風景）



ありがとうございます

○中央公民館図書室へ
貝沼美千代さん（嘉山三）　四八冊